

2021. 8. 22. 主日礼拝説教
聖書：ローマの信徒への手紙 15章 1-13節
『自分だけを喜ばせないで』

ルカ 16:19-31 に主イエスが話された金持ちとラザロのたとえ話が記されています。金持ちは毎日ぜいたくな生活をし、ラザロは病気にかかって金持ちの玄関に残飯で飢えをしのぎと座っていました。やがて二人とも死んで、金持ちは火炎の苦しみに遭い、ラザロは父祖アブラハムのふところで憩っていたという話です。なぜそうなるかは説明されていませんが、旧約聖書のヘセド(いつくしみ)の考えからすると、本日の聖書の箇所パウロが語る「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません」という内容が妥当かと思えます。おそらくは初代教会のエッセンスを色濃く書き記したパウロ書簡が、後の福音書等に間接的に与えた影響は計り知れないものがあるかと思うのです。特にパウロが弱い者の弱さを担うことをどれほど大切に考えたかということは、マルコ 2:1-12 の中風の人癒しの出来事からもうかがえます。そこでは主イエスが中風の人を運んできた人々の信仰を見て「あなたの罪は赦された」と言われました。それは中風の人を不自由を担って共に生きる人が一緒にいることを神は善しとされたということなのです。

神がいるなら、どうしてこんな苦しみや障がい、病気があるのかという人がいます。そういう人は、神というものは人間を幸せにし、富ませ、願望を叶え、繁栄を与えるものだという考えを持っているようです。聖書では、そういうイメージは偶像崇拜として拒否しています。それらは旧約聖書の昔から偶像の神バールに当てはめられていて、主なる神ヤハウェは苦しみを担う神、わたしたちの存在理由を明らかにする神としてイメージされています(イザヤ書 53 章)。

そして、パウロや福音書記者だけでなく預言者がこぞって証しするように、主イエスとは人々の病や苦しみを担う者として生きるということなのです。聖書の証しする神とは、無いものを与えて持たせたり、出来なかったことを出来るようにすることを第一とする神ではなく、互いの弱さや出来ないことを、強い者や出来る者が共に担い合うことへと導かれる神なのです。

北原白秋が「人間なれば耐え難し、真実一人は耐え難し」と歌いましたが、わたしたちの本当の苦しみは、単なる病いや障がいや不自由ではないのです。そうではなく、苦しみとは一人で背負うことなのです。病いや障がいは不自由ではあっても不幸ではありません。ただ一人ぼっちで直面しなければならぬことこそ不幸なのです。

わたしたちは、ある部分では弱さをかかえ込んでいたり、心身にキズを負っていたりといろいろと不自由であったりします。しかし、だからといって全てが病んでいて完全に不自由というわけでもないのです。強い部分もあるのです。その部分で弱い者の弱さを担うことが出来るのだと聖書は宣言するのです。こうして、互いに自分だけを喜ばせたり満足させたりするのではなく、弱い部分をかかえている人間同士が、わずかかも知れない強い部分を生かし合いつつ他者の弱い部分を担ってゆく時に、神の創造の目的に適う平和がやってくるのではないのでしょうか。自分のお金だから、自分の時間だから、自分の体だから自分のために自由にしてよいものを、苦しむ者の苦しみを担うために用いるときに、神の喜びが実現するのです。